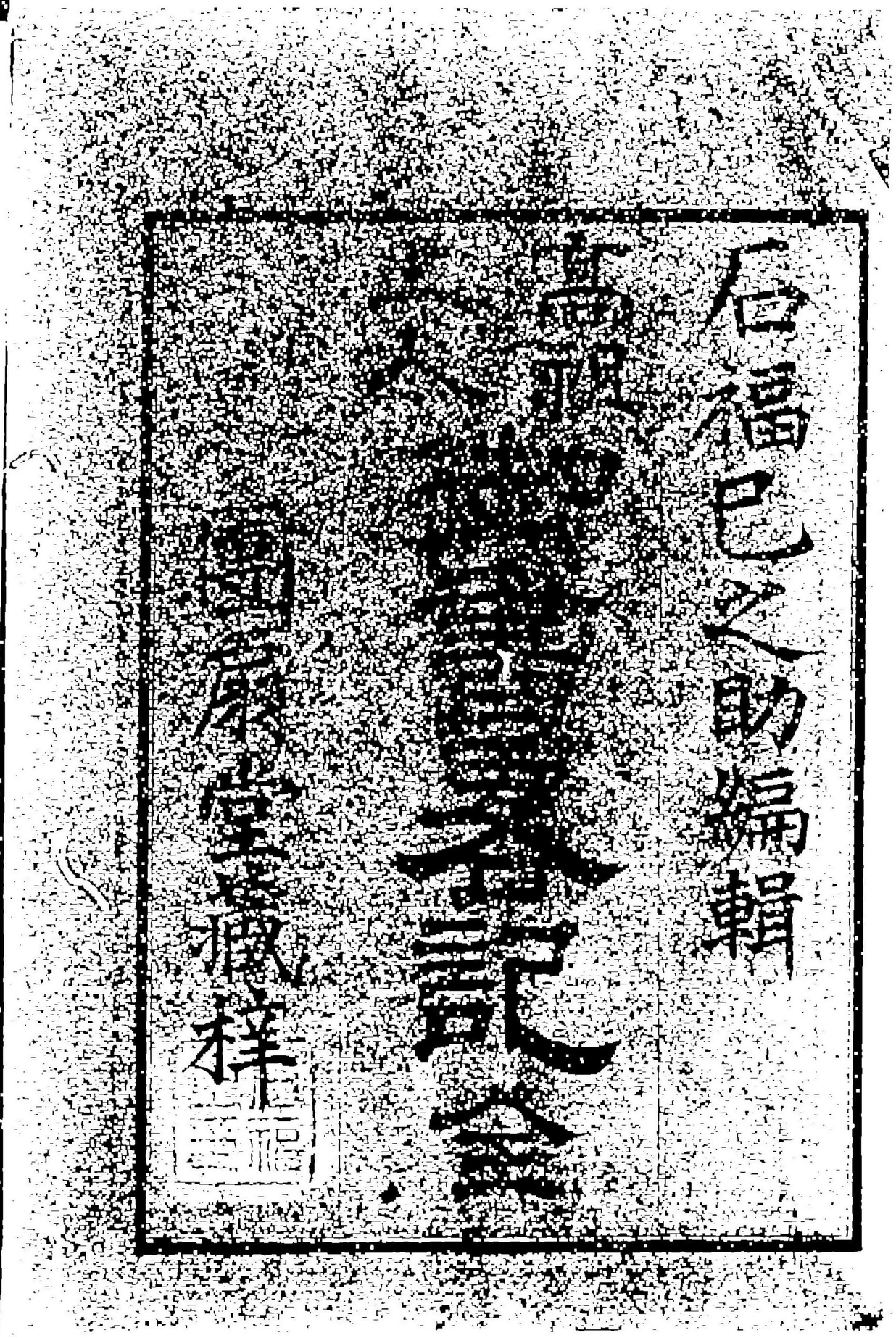

福建通志
總督部堂臺灣
閩浙
陳
諸
寅

典雅論

明萍十七年十月序

村雲日榮

そもく此肖像ハ由来ハいつ〳〵弘安四年二月の
こと祖甲斐の國巨摩郡波木井郷ハ南部六郎
実長とゝふ士豪の里に恒ゝ日祖を住しゝく師弟の
縁を結へる時祖先の法會あるまゝ上人を請
一週間の御斎をまつりけるゟ打ち〳〵京都より
親愛ゆへる画工来りて逗宿し大上人の御像
はまを奉るあり是ゟ渦仰愛慕の餘り旦分袂の
なごりをおしみそのほどの法堂乃ゟこまゝくおれいそそ
その影を寫し〳〵なほ手ゟ
入道實長日圓者蓮華三郎義光四代南部六郎号波木井殿
明治甲申年八月鏑寫之　栃鳩生　栃鳩

第一生死血脉

生死一大事血脉書ハく夫生死一大事乃血脉と者所
謂妙法蓮華経是なり。其
中に座を並上行菩薩ゟ
字ハ通玄寺ゟ劫よりゟ対の間も身を離ぢる血脉なり。妙そ
死なり法ハ生なり此生死ゟれは又生ゟ
脉蓮花の法門ともゆ〳〵なるべし。依正因果悉是蓮花の法なりと釋し給ふ
依正とゝふハ依ハ依報の國土正ハ正報の身生ゟ少ゝ國
土も皆生も皆妙法ゟ生死なり。因も果も蓮花の法ゟ
して天地陰陽日月五星地獄乃至佛果まで生死の二

法なりといふ事・かくのごときは生死も皆妙法蓮花より生死となる事・又止観にも是法性の起滅も是法性の生死なりと宣て雑阿含の二佛も法性起滅の法門と・雑一のごとく実成の釈尊と此二つ全く差別なく・妙法蓮華経と・ひらきて唱る所を生死一大事の血脈とは申なり・此の日蓮ら弟子檀那等の肝要なり・法華経を持とは是也所詮信ぜん人は今日有と寤く信心を致・南無妙法蓮経と唱る人を・経ぬは是人命終の後は千佛来りて手を授ふと説て候・悦ばしき哉一佛二佛ならず千佛まで来迎し・我ずまをとる事なのんと歎きの涙おさへがたく・法華経の行者を罵詈せん人命終の後は阿鼻獄に堕ん事疑なし・法華経を信ずる人は地獄をやとるまじきぞかし・定めて獄卒むごのひぶ木をもつて・頭をわるべしと見えたり・されば神ハ呵責せん弟子旦那ハ・ゆめゆめ有まじ・倶生神ハ瞋ら弟子旦那ハ・ゆめゆめ有まじ・閻魔の人ハ瞋ら弟子旦那ハ・ゆめゆめ有まじ・此等の人々の額の上に・妙法蓮華経の五字を・かきつけ候ぬれば・地獄の業をば・消滅して・即身に仏性を顕し・法華経の行者を・あだみ候ぬれば・現在の生死未来の佛果を成就せんこと・疑あるべからず・されば此経を持ち奉る・我等が現在の生死・未来の佛果・三世ともに・法華経をはなるまじ・ざる所を・ぬけ・血脈おさへとは・ゆめゆめ・なり・不信謗法の者ハ・即断一切世間佛種とて・佛の種絶えぬ・死一大事の血脈ハ是なきなり・されば日蓮ら弟子旦那ハ・自他彼此乃心

なく・水魚の思ひを成す・呉体同心不朽無妙法蓮華経
と・唱ふる所の生死一大事の血脈とはいふなり・是則今
日蓮の弘通する処所詮みて若然ハ度宣は布の大願
も叶ふべきそのなり・お撰へく強盛の大信力を出して・南
無妙法蓮華経唱へ奉二世安楽と祈らきのふべし・
生誰生死の血脈よりさ外ふ求る事なの・煩悩即
菩提生死即涅槃とは是なり・但一信心の血脈なくハ法
華経を持つも無益なり・南無妙法蓮華経北略書

文永九年申二月十一日

日蓮 在御判

寂蓮房上人御返事

第二心妙法

寂蓮房書ふ曰く・聞て云く妙法の二字は何事を説ぬ
ふや・答て云く・先妙とは十界の当生乃心法をさして
妙とハいふなり・されバ天台大師も云所の妙とは妙を
不可思議ふ名るとも・みふるらばる故よ心を名つけて妙
と云なるとも・釈のひく・一
切衆生の心法ハ不思議なる故ほそく妙とはいふなり・
凡此妙心城具さてるそのはハ・介ふ有心即具三千とく・蛇
蠍蚊蛇のつくさるきそのまでも・一念三ふの妙理を具足す
るなりと・止観ふは宣ふくり・然ハ則妙の字ハ外乃事に
もつらず・全く我等が心法の当体なりと・かくのおと

く覚知して妙を指妙法の指者とハいふなり。ハ衆の龍女も妙乃一字より近作なり。此龍女又提婆とも変する事成男子と説ふハ龍女即提婆と変すると里。猶に変成男子と説ふハ龍女即提婆と変すると里。提婆又龍女との言なり。提婆とそ波の女城提くと書ゆくなり。是別二て字是たり。提婆とそ波の女城提くと書ゆくなり。是別天台意お城の大事也。されバ此二人を煩悩即菩提生死即涅槃と。まらひ侍ふなるとしくのまゝは則妙乃一字ハ提婆龍女の一体不二我那せる。石思議とも是をいふなり。又妙の一字よおくバ点あり。此ハ点ハ記法花ハ年の説法名生ハ外ハ肉団龍女ハ衆の成佛をともあらハせる事里。次ふ法の一字は十界互具百界千如三千世間一念三千の法と八十界十如権実の法なりと釈一のひて法の一字ハ我等が色法の此身をはしくはふ也。さまゝバ妙法の二字は我ずが色心の二法ゆくく本来のくけどく。我色心ハ不思議の法なりと住じ悟る所成成佛とはいふなり。龍女ハ色法の悟るまゝバ色心不二なる成心の法とまるまゝバ即心の成佛なり。提婆ハ妙法とそ名るまゝ。妙法の深理是よ里外ふもともむるまゝ。ものれぞ則提婆龍女の成佛といふは。我ずが色心二法の成佛のうそくだんのうそくだんを。提婆ずが生死即涅槃ハ我ずが法身の成佛をなうハきり。龍女が生死即涅槃ハ我ずが法身の成佛をなうハきり。穴賢穴賢。此旨をよくく信受ず

べきなり。日蓮が弘通する所の法門を立つる事の一念三千の本尊と名るなり。是成就す
る胸乃肉団おなじ理の一念三千の事の一念三千なり。妙法の二字は一事理乃一念三千にして法脈自然の
ふるまひなり。南無妙法蓮華経已上略書

弘安三年八月一日　　日蓮在御判

最蓮房上人許

第三南無妙法蓮華経の蓮華
蓮華座に坐し給ひぬ抑妙法の蓮花とは何なる水よ
ひらきいでたる所の池ぞ生死する花ぞと難で之

我案ずるぶ。まことくもさぶ外をも求るぶ。なるべき我
等衆生の胸の肉は池なり。心法は水なり。悪業の泥の中
に心因仏性我そなへたるをさしてぬ法の蓮花
とは名る也。然ば則悪業煩悩我泥と心中の仏性を蓮
の根とし。善心を水とし。智恵を莖とし。勤行を葉とし。
精進を花とし。能施を開花とし。智善を体とし。仏果を
菓とする蓮花なり。夫世間の蓮花は夏はひらきてみそは
ひらく。冬は池中ふせ。て陸地ふせ。ば風もふまず波も
沈む。氷に閉られ。炎ふむ。仏性の蓮花は三世不及
の蓮花なるまばゝ裏表なく。ふまもとさるぶ。通一切衆生の花
なるまばゝ頗。三有ふまもあまねくそらく。義悉不二の花

れバ惡業の摩滅をもえらびず。邪正一如乃花なれば
煩惱の泥中に生長して十惡の風雨も破ず。五逆の波水
も沈ずとも。紅蓮の泳ゆもとちらず。焦熱の炎にも
ちぢまず。かく叶てときハ佛性の蓮を我も人も持
るは貧女ゴ衣内の寶藏をもちらず。誌ら心肉の色を寂
と悟らざるゆへ。ちらまざども衆生の佛性ハ雲の中ゟ
月出の中ゟ金石の中ゟ大木の中のごとし。らく
きくみざれども妙法乃蓮花の功能を説バ是
を功能蓮花といふゆへハ一切衆生の骨の肉ゟハ分の肉團
あまね白くして堅し是をハ蓮花と名く。大小無碍を

えらばず。蠻貊放妃のはたちまでも胸の肉ゟおのの
ハ分のゆくとんハ義ふの蓮花あるまて。是ゟ本来本ごと
くして無量の徳佛を納ると説ときバ一切衆生ハ三世諸佛をわ
さ免さる法乃宮殿いみじき寶塔なり。此胸中ハ義
の蓮を境はらく功生の蓮花と名つく。上ある諸ゟ境
本ゟの妙法とはいふなるまて。衆生のん法ハ一のるゐとのそと
説きうせのふ境法華經とハ名つくる方ゟまて。法華經をと
きのふ時ゟ多寶塔ゟちまのまて境衆生ハ功生ごの功
德寶塔のごとくなるぞとをしへん為めに出現しぬふな
まさされバ教主釋尊乃重ゟ恐べきちまて。抑このくのごとく
一切衆生は妙法蓮花乃名神諸佛安置の寶塔なりと

悟ぬまゝ」バ。假地獄の猛火よ入とも我心ニそ倶体倶用の佛なれと住翻せざバ。やゝのそく開悟すべし。餓鬼ニおちて飢渇の憂よ沈時も我心ニそ八葉の蓮花なれ。生身諸佛の宴坐とござにひらきおバ。即身成佛すべき也。さまゝバ地獄も餓鬼も畜生も皆妙法蓮花乃安ゐのらさるなり。衆生の舟をあらくめぐそ己身米佛なせしなり。彼方乃無垢世界ふく在せしゝ変の蓮花といふハ我女ら心法の蓮花を悟顕しくせる方を至。生住翻ざに強事なくして深くは諸人ら此蓮花に座せざらんや。縦作心よくくし己身成佛こそ叶ハずとも未来成佛を期ひなり。

法ゆゑバらちのくめくる成佛なり。此ゆくふ經ハ閻法者を一乗米佛とて法花經をきくそものを一人もそれず米佛すとは説ぬくり。ちて別生ハ本来のくのごときぬ法蓮花の蓮祢なりとをしくなふ。佛乃御言をまバ經とハいふなり。まくハ平等大恵一乗妙法蓮花經と名けぬふも此意なり。男計の腦の内ゞハ善の蓮花なれ女の身ハなげくべし。上臈計の心法のぬ法ならば下臈の身ゐてふ。うるしむべきふ。十界一味にして上下男女の差だてなきもらすべきものもなり。意を別そくニ無差別二ハあらぬなふをづけ又ハ平等大恵ぬ法蓮

南無妙法蓮華経上巳 畧書 餘書第八

蓮花房上人許へ

第四妙法難値

日蓮在御判

法華題目書に曰く。夫法花経には儆ごとく妙法ハ嘆ぐし。さればバ法華経第一の巻にハ。無量無数劫にも此法を聞まこと亦難しと説き。第五巻には此法花経は無量国の中に於て乃至名字をも聞まこと得可らずと宣へり。かくのごとく此経の御名も聞がたきことは諸佛出世したまへども法華経を説たまふことまれなればなり。さればを以て須扇多佛と多宝如来は世に出たまひしかども。法花経乃御名をも呼ばずして釋尊も法華経の為に世に出させたまへども。四十二年の間は御名をもかくされ。御年七十二と申せしに始て妙法蓮華経と八唱出したまへり。然れども大唐日本辺国の者ハ是をきかず。佛の滅後一千二百餘年に及て纔に御名ばかり聞得たりしかども。此経に値奉ることハ三千年に一たびはなさく優曇華無量劫にはへる一眼の亀の浮木の孔にあへるよりも。大地の上に錐を立。上大梵天宮より芥子を投に錐のさきに芥子のつらぬかれたるよりも。此経に値奉ることは難し。此須弥山に針を立彼須弥山より大風のふかん時糸を投さんにはりの穴にいたりて糸の入たらんよりも。妙法の題目に

は値まるるなり。はまた此經の題目を唱ふる人ごとに生盲の初て眼ひらきし父母をみるがごとくもらまいらせ候ぬとうたがはせ給ふべし。仍て安樂品より經九易城連ねて四經ハ指經。若轉ハ我則歡喜ぎ。諸佛も加護ありと說ふハ是なり。何なる佛菩薩も此題目を唱ふる人を天善神の衰愍守護を祈るべきなり。

南無妙法蓮華經

文永三年癸丙正月六日

日蓮在御判

第子檀那中

第五信ん可發

題目畫ふ曰く。正直捨方便の法華經ふ仏信得ん人と說うまま。双林最後の涅槃經ふ菩提の因緣無量なまま）ど也信心を說ハ收ふすと宣ふまま。されぞ佛ふ入の根本ハ信心を本とて。五十二位の中にも十信を本とて。十信の位ふは信心初めなり。緣智妙なくとも信ん力ら

んそのハ鈍根も正見となり。ことひら愚痴とも信心なきも此を誹謗闡提の惡人となり。善星比丘ハ二百五十戒を持ち四禪定を得。十二部經ハそらんぜ一人なる。提婆達多ハ六万ハ子の變花を覺十八變を現ぜ一なり。是ハ皆大城よりとをく。提婆ハ心の成佛すでに有緣無信の人にて

之能根某一の須梨槃特も智恵も有ず悟も有ず。但一
念の信心あつて成ぬ。又迦葉舎利弗等ハ
信心もあり智恵もまして羅光ぬ末と佛ハ授
記のべ。末代の信者もまゝ法門品ハ又ぬ末の滅度の後ふて人まてぬ法花経の
一偈一句を少て乃至一念も随喜せん元のよハ勿論
菩提の記を与授べ。と説さまく里。嗚呼奥ぐき人分を
うけ。値ぐき佛法ふあひまり。争ぢ左くる迎べき。所ぐ住
心を取ならハ。大小権実ふる事ハ。諸佛出世の本懐衆生
成佛の直道ふる一乗をとゝそ信ずべきれ。抑乃至諸
経ふすぐきてくまゝせば。抑つくも又善人ふまされ里。

宝を仏ふく経ふは。雖抑是経者於一切衆生中為第一
と説のくり大聖の金言ふうそぶひなゝ。迷ふ人此理をふ
らずゝく狐疑偏執を致すハ堅左地獄の根源ふり。
きゞ佛ぢ生物不信者ふ堕ぬ当堕悪道。と説のく里。すでふ
くふ経を抑ち名を十方乃佛陀のくゝん海ふちぐゝ。等
を三世のぼさつ乃大悪天ふ施すべゝ。志ふまバ法花経を
ふもちる人ふ天弥八部諸大ださ川を仏て我眷属と
する物あり。志のゝまふぜ因果の肉団ふ果ハの佛眼
をそなへ。有為の凡庸に名為の聖衣を着ぬまバ三逢ふ
恐ぢなゝく経に悩ちゝ七寒便の山ぢ嶺ふ登り九法界
の雲をはらひ名垢地乃園ふ花ひらき法性の空ふ月あ

きらうあらん是人於佛道決定無有疑の文こゝにあり唯我一人能為救護の説疑なし
南無妙法蓮華経 已上 書写畢 御入
文永三年寅正月

日蓮在御判

弟子檀那中
第六檀実部書畫
聖愚問答書 小曰く・夫二乗の教主釈尊は・十九衆まで伽耶城を出・檀特山にして・三十成道の時一念三千の法蓮花経を説給ひしより・つぎ〳〵此の法と説と思つゞめきまで・一代の衆生の根性不同まで此の法を信ずるに堪ざる・機を説給ひしより初四十二年の間は先随宜方便の教機を設て・実相の極楽をとくの人・後八年が間は本懐の法華経を説の序分・甚深の義理を説のこり・其時法華経の序分・無量義経に於て先小乗の教と後八年の説教と方便と実との境を引て・我先小道場菩提樹の下に端坐する事二七日にして阿耨菩提を証ずる・仏眼を以て一切諸法を観ずるに宜説すべきの機なし・所以者何諸の衆生は性欲不同なるが故に・性の性欲不同なるまだ種々の法我説方便の力我が如く四十餘年には未顕実あらはさずと宣のべり・扨法華経に来て来一の実方便を捨て正直捨方便但説無上道と宣べ・乃至四十餘年已前所説の諸経の中に

宜方便の教をすて、但真実の無上道を説給となり。されバ念仏禅律真言宗の経法を悉くすてよとハ、此経文に明白なり。尚其上に第二巻譬喩品にいたりて、但楽受持大乗経典乃至不受余経一偈と説て、此大乗妙法蓮花経を受持つものハ、権教権宗の一偈一句もうくべからずとあるぞと教へ給ひ、同次の文に若人不信毀謗此経則断一切世間仏種其人命終入阿鼻獄と説き玉ふ。此意ハ若人法花経の説を信ぜず、誹謗する物ハ諸仏を殺せる罪によつて其人命終らバ阿鼻地獄に堕在すべしと誡めたまへり。法師品にハ法花経ハ一代超過最為第一と説、安楽行品にハ於諸経中最在其上と宣、薬王品にも十喩讃経して、諸経中の王なりと称歎し給ふ。上に名実ぬきと十方分身の諸仏も皆霊山に来りたまひて、御舌を大梵天に付きて証誠の所説皆是真実也と証明をくだし給り。然ば則法花経ハ衆仏の往生の直道にて、末代衆生出離生死の実説なる事ハ青天の日輪、暗夜の満月のごとし。誰人か迷べからん、何人か信ぜざらんや。然るに此明白なる金言に於て顛倒の見を起し、法花経最為第一の文を第二第三と読、正直捨方便の金言を正直捨真実と意得るハ、天魔鬼神の所為なりと怖べきなり。真言浄土の三部経ハ、釈尊一代五時説教の内第三方等部の内より出たれども、釈迦諸仏出世本懐の経にあらざれバ、只しばらく衆生

誘引の方便に設たまふ處なり。譬へバ塔を組足代のごとし。法花経の寶塔成て後ハ念佛等の足代ハ切て捨べきなり。然に法花経此後にいくたびも尚念佛等に執着するは塔を組て後も足代に着して寶塔を用ゐざるがごとし。何ぞ[illegible]まくがハざらんや。四十余年未見真実とハ念佛禅真言等の法門を打破りたまふとの金言也。抑正直捨方便但説無上道とハ念佛真言禅三昧をすてゝ。但法花経を受持すべしとの事也。是を以て阿弥陀経の對告衆たる舎利弗尊者ハ何ぞ経を捨て法花経に帰伏して華光如来と成たまひ。四十八願の付嘱を受る阿難尊者ハ浄土三部経などを捨法花経を持て山海恵自在通王佛

とハ成たまへり。舎利弗ハ千二百羅漢の中に智恵第一の上首なり。阿難尊者ハ佛弟子第一の多聞廣学の知識也。斯る極位の阿羅漢在世の祖師なるを尓前權教の説に迷をとめず。三部経を捨法花経に歸伏して無上菩提を得ぬ。寂滅後の祖師ハ其謗をふむべきにあらで佛説に顛倒して衆生悪道に落すハ第六天の魔王学者の身に入ゆゑ也と佛ハ未来記し置給へる。法華経第五巻勧持品に濁劫悪世中多有諸恐怖悪鬼入其身罵詈毀辱我と説たまふハ是なり。文の意は悪世末法の中にハ恐怖べき事多し。悪鬼魔王学者の身に入て法花経を毀行者をなやますべき也。されバ則ち一代経中を究たる諸宗の祖師。達磨弘

法華経を諸経そこを超越一行者を憎嫉するゆへは皆悉く思ひの其身の所為なりと虎狼悪獣を見るようを尚悪智識を怖べきなるさまバ涅槃経疏五巻をばてのゆへ虎狼悪象ハ只身を壊のみ也て人の怨嗔をあくいばに悪知識ハ色心俱に壊なり悪智ハ能く悪道に堕とおぼしさまざまーのひが事も仏の成る小乗経の依義不依語と云ふ文を依るべし祖師人師の語ハ依べからず法華経の依憑仏説莫住口傳とは仏説ひ普賢文殊等のだ仏前の諸経ハ心直捨方便とよくく捨て但一仏乗の直道也とよくく捨て但一仏乗実の起人を知るべきなり

南無妙法蓮華経 巳畢書 篇目入

日蓮在御判

第子檀那中ね

第七侍法惡怖

杜野殿御書 ハ曰く御身にいたく此程我ぢ退転なく十ぬ自我偈を讀誦し唱題目の功徳と我ぉの唱申題目の功徳と何なとの多少

不同ふへきやとのう子更ふ功徳の勝劣ハそへらるゝ也。其故ハ愚者のもてる金も。智者のもてる金も。等しく金なるかごとく。智者ことをす。愚人ことをすれ共。その利ある事ハ。同しかるへし。但し此経の文きゝて唱へ奉らば。その果報ハ。妙楽大師の法花経の記ふ曰ふまでくの果報ハ。はれハ妙楽大師の法花経の記ふ曰ふ。一ハ諂慢二ハ解怠三ハ計我四ハ浅識五ハ著欲六ハ不解七ハ不信八ハ懐疑九ハ疑惑十ハ誹謗十一ハ軽善。ありと。此十四悪善ありと。此十四誹謗第二巻ふ。十二ハ憎善十三ハ嫉善十四ハ恨善ありと。此十四誹謗の人ふ。命終せば。阿鼻獄ふ入ふく一劫ハ経ふ。一劫ハ経ふ。一劫ハ経ふ。かくのごとく展転してく無数劫ふいるべしと説のべたり。

さきバ十四誹謗ハ在家とともに怖べきなり。何ふハ花経を信ずるふとも。誹法乃心あらば。榛千倍ふ増の足一ハ入たるごとくなるべきなり。法花を信ずる人の一口ふ。南無妙法蓮華経。一口ハ南無阿弥陀仏なんと申ハ飯ふ。黍をまぜ〳〵へたるぐめり。法花経のみふ。世間の学者ハ法華経ふ。権大乗経ふ。乃至諸経一偈と説たるハ是なり。里白蓮も左こそとおもひへども。経文ハらば。聖人の大王の種を妊て。又民と嫁げバ王の種と民の種とまじ〳〵まて天のかふ養と民神のかふ養ふ捨らまじ。王國土逆ふ破の縁とならぬべし。又二人出来ぬまバ王ふならば民

ホトケ非人なり法華の大事と申ハ是より external 脫の法門は法華経の肝心ゆく三世十方の諸佛ハ必ず external 法蓮華経乃五字を種として佛ホ成ルなり毛 external 佛ホ種ホハ五字こそ残るホふべし趣ホ external 日蓮ガ弟子檀那ホホ他人のホホへ残ラけず一切法華 external 経の按ホホこそ肝心なれ信ジすべきなり残ハすホち external 智者愚者の唱る功徳ホホ external 然なるんのみ

南無妙法蓮華経 external 巳書書様 external 十二月九日

日蓮在御判

松野殿御返事

高祖御書畧上終

法義狂乃至一念
まことを
とくの法宝
身土寂光
身土佛土

又此國の天神七代地神五代の神々人王等を始。上下万人ハ皆悉く釋尊一佛の眷属なり子どもなり我ハ主なり。親なりとの經文なるを。况や唯我一人能為救護と云此三界の衆生の諸の苦患煩ひハ唯釋尊一佛のみよく救護なふとの心なり然ハ此我等衆生が今天地水火黒白を別ち。父母主君妻子等を見きまへ知るも皆教主釋尊のをしへなり佛法を信じ二世を祈る此佛の善悪にかゝらざるはなし一分も弥陀薬師大日如来の教にかゝらざれバ釋尊此慈悲ハ大地よりも厚く虚空よりも広く天よりも高き。御恩徳の佛ぞかし。ある功徳の釋尊なれバ王も臣も万人も人ごとに父母よりも重じ神よりも

いかめ奉りなバ何なる大科侍るとも天神も悦び地祇も愛護しめふべきに一德もなき無縁他方の佛を主師親ともてなす故に天神地祇もいのりなふと見えたり譬へハ日本の人にして漢土高麗等の國王に心をかよハせ此國の大王に不忠不義なるハ其身保ちがたきがごとし今日日本國の一切衆生全く亂の如し上下万人一同に弥陀薬師大日等を本師と敬ひ金銀をちりばめて本尊を厳財寶を費して堂宇を造れども法花經と釋尊にて墨繪木像にはくをもひろげで總に料堂をろくまへて安置きり。例せバ他人にハ志をつくしね妻子をバ厚くもてなして。吾父母をは疎するがごとし。經にハ唯我一人能為救護

とゐて。二人救護。三人救護とハ仕ざるなり。凡日本國にく頭をそり袈裟をかけざる僧侶ハ一人もなく釋迦の御弟子なり。彌陀大日オのごとく一ホハふず。然るをあまごとも至きざりてとくもて我つくり三塗の緣の釋そるなり。若句ハ雜染雜行捨閉閣抛ときらひ。第三誡逆罪の佛と罵詈ず何ぞある天魔入来りてく此大科重罪を造ならん。先三界の主を捨るゆへ。主人の中宵ハ逆罪の教なり。況ず父の釋そるを捨るもつふ。五逆罪の惡人なり。三法ふ師匠の釋そるふ背ゆへふ。七逆罪なり。こゝく二十罪を

まてくる惡人ふゝく母ゝ間大城よおちんるゆハ勿なり。さきハ譬喩品の次のゝ。ごとくん人命終入阿鼻獄とハ説せのゝへるなり。自蓮坊義雅と申ゝ人ゝ此ゝ文ゝ見ゆゝ弥陀ぬ来ハ迎よおゝく念上念とゝ申ゝ時自ら誓ひを立てゝ此ゝ娑婆ゝ穢土我きらひ。安養淨土を願ひとりのへり。釋そるハ千ゝ時窓海梵士とゝ申ゝ我ゝ一人ゝく能救まもるべしと諸佛の嘆すそのへる十方淨土擯出の名ゝ告我國土の娑婆世界ふ生ゝ来るべしと警ゝ故ゝ此娑婆ゝ穢土とそゝ説のへり。然ハ則ち玉の名生ハ弥陀オの諸佛ふ嘆そる十方淨土より擯出ゝ穢土とそゝ説のへり。然ハ則ち玉ま事なり。諸佛有オ我迎取のふ理なゝ我オゝ。このことを

はさぐ雑答一佛なり・生故より今生三界皆是我子と云
ふ・些尒の程の中に五百の大罪を造ればや雑答ハ我らを救ひ給ふ
ふ・些尒の程の中に五百の大罪を造ればや雑答ハ我らを救ひ給ふ
みいらく・末世穢土の中に於て作佛せん時・十方淨土
擯出せ衆生ハ我一人ふさ皆度すべきなりと・第十四の
罪生言く・地獄ふ入く大苦代て衆生の苦を
ふとゞめむ・悉く衆生ふ施べしとなり・第十五の罪ふ
言く諸の衆生ふ無量の五逆の諸の罪を
令一く・地獄ふ入く大苦代て衆生の苦を
更べしとなり・このごときの大悪逆罪ふ依く生土乃
あるまとは成さまつり・さる程ハ天台大師も西方は佛別縁
呉るまバ・父子の義成さぞと雑せらまぬ乗大師も弥陀
雑逃既ふあるまに・況宿昔の縁別ふ一く化道不同なまバ
父子の義何ぞ求就きんやと宣のくり・宿昔の縁別と
ハ過去ふ於く・娑婆を厭とふ捨との誓願の不同ふく・悲喜
猛のごとあり・父子の義ふ求就せざるとハ・ふてゝも佳生は叶
ハぬとの義あり・志のれバ日蓮が第子旦那ハ天ふ二の日
輪なく・國ふ二人の大王なく・ふ二人の主なまぐごとく
喜得て・唯我一人の雑答を主師親三徳の縁の本師なり
と釈尊ふ値奉べきなり

南無妙法蓮華経上巳書畢

弘安元年宮九月六日

妙法尼御前御返事　日蓮在御判

第九付法導師

言ふ楊入道出ふ曰く。我ず此の若父大覚世尊の入寿百歳の時中ごろ忽出現せ〻く。一切衆生の為に一代聖教を説ぬひく後在世の衆生は予が如き化せず滅後の衆生我ぱ何ふせんと経ときまひ。即ハ万聖教をあつめ字と成ふ金撞大会法義猶涅槃経ず如き阿経の珠。普賢弥勒等五乗ともも。八万聖教の肝心法義経の眼目ず如き菩薩声聞を八せずの弁ふ譲りぬハざ。此大地の底より上り給ず事ハ本化四ぼさつハ釈尊久遠成道最初の御弟子ず〻く。四ぼさつ形貌威儀ふ言を仏く宣ぐ〻く。ふをも聞ぐし釈尊初発心の時ふ法華。涅槃林金剛幢。金剛般若。華厳の四ぼさつ各十恒河沙の眷属を具ぜ〻も。大集経ハ虚空蔵菩薩も大日経ハ金剛頂経の三十七尊の中ぬ十六の大菩薩も金剛頂経と常辨とのごく。浄弥と毘山とのごとく。法華ハ本化四菩薩ふ比校ハ猶も。乃至不識一人とは疑ぐハまし〻ぬり。ふる弁ふ付属の方軌も是ふ付嘱〻〻ぬ。抑法華四ぼさつハ釈尊久遠成道最初の御弟子ず〻く。四ぼさつ形貌威儀ふ言を仏く宣ぐ〻く。ふをも聞ぐし釈尊初発心の時ふ法華。涅槃林金剛幢。金剛般若。華厳の四ぼさつ各十恒河沙の眷属を具ぜ〻も。大集経ハ虚空蔵菩薩も大日経ハ金剛頂経の三十七尊の中ぬ十六の大菩薩も金剛頂経と常辨とのごく。浄弥と毘山とのごとく。法華ハ本化四菩薩ふ比校ハ猶も。乃至不識一人とは疑ぐハまし〻ぬり。ふる弁ふ付属の方軌も是ふ付嘱〻〻ぬ。

の御前にて一代聖教の十大神力を現じ給ひ、十
宝塔の中にて是れ好き法華の妙法蓮花経と讃め
なり。其ゆへは、釈滅後の一切衆生ハ皆一子なり。平等に
不便あり。死ぬる時ハ医師の智ひ病ひ治ひて薬を与ふる
ごとくなるべし。滅後初の五百年の間ハ阿経等小乗教の薬
を一切衆生ニ与ふべし。次の五百年ハ久遠の種子の権大乗の薬をもつて衆生の
親ぞ。華厳大日般若の像法の時ハ薬王観音ぞ出て、法
与ふべし。滅後千年の末法ハ一閻浮提の衆生ハ皆悪鬼の入
華の題目を除く余の諸仏菩薩の諸法ハ衆生の病
よ。ぞ入るべからず。病ハ重くして薬ハ用ひず。死ぬる時
の薬とぞなる。

上行菩薩出現して妙法蓮花経の良薬を一閻浮提の一
切衆生ニ授与すべし。もつての外の大事ぞ。此事を悟ら
ざる人ハ一人もなし。但し不軽菩薩の杖木瓦石ぞ
敵せんごとくに、当今不軽弟子を一切衆生ニ杖木瓦石ぞくせめ
ごとく、当今不軽弟子を一切衆生ニ杖木瓦石ぞくせめ
らるるなり。されども二十余年の間ハ妙法
蓮花経ぞ弘通すれバ、或ハ罵られ、或ハ打たれ、或ハ流罪或
ハ所を追ひ出され、或ハ命ぞ断たんとするなり。然ども妙法
蓮花経ぞ弘通すれバ、本化四菩薩ぞ出現して、末代悪世の
一切衆生の為ニ南無妙法蓮華経と唱へさせ給ひ
さ候ハ、本化の菩薩ぞ出現して、四大菩
ハ牙と歯とのごとく、音と響とのごとく、魚と水との如

く月と光とのごとくなるべきなり

南無妙法蓮華経上巳畢書寫縁出入

建治元年亥七月十二日

日蓮在御判

高橋六郎兵衛入道殿御返事

第十本化垂跡

妙楽書に曰く扨日蓮ハ聖人にもあらず賢人にもあらず戒にもあらず智にもあらず此法華経の題目を流布すべき五百歳の時に生まれて近ハ日本遠ハ月氏漢土の諸宗の人々のいまだ唱へ始めざるに南無妙法蓮華経と高声に唱て二十余年を経たり其間に或ハ罵られ或ハ打れ或ハ疵を被り流罪も二度死罪も一度に定られぬ其外の大難ハ数しらずされバ勧持品二十行の偈ハ日蓮だにも此國に生ぜずんバ釈尊ハ大妄語の人八十萬億那由他の菩薩ハ提婆が虚誑罪にも堕ぬべし経に諸の無智の人あつて悪口罵詈し刀杖瓦石を加ふべしとあり今の世を見るに日蓮が外の諸僧誰人か法華経につきて諸人に悪口罵詈せられ刀杖等を加られたる日蓮なくバ此一偈の未来記ほとんど虚妄となりぬべし同じく次の文に悪世の中の比丘邪智心諂曲にして白衣のために法を説て世の為に恭敬せらるること六通の羅漢の如しと説れて候今の世の念仏者禅律宗等の法師な

くハ此經文も妄語也又國王大臣婆羅門居士等に向て我等にあしきを説て是外道の論議邪見の人なりと誹謗すべしとなり今の世に諸僧等日蓮坊を讒奏して流罪さするハ此經文も空しかるべし又數々擯出せらるべしとも説たり數々ハたびたびなり日蓮去ぬる弘長元年五月にハ伊東の島へ流されき又文永八年九月に佐渡の國勘氣を被らずハ數々の經文もあハせて又房州小松原にて頭に疵を被り龍の口にて頸をきられずバ及加刀杖者の經文も虚妄なり刀杖の中に杖の難にあふ人ハあるべし刀の難を受に不輕ぼさつハ法華經の故に杖木瓦石を説れて杖の難にハ値たれども刀の難をきらべ

天台傳教ハ刀杖不加とこそ見えたれ剣の難にハ一度もあふ人なきに日蓮ハ二度あへり杖の難ハ去ぬる文應元年八月廿七日名越松葉が谷にて平の左衞門が郎等少輔房といひし者日蓮が懐中せる法華經の第五巻を以て日蓮が面を三度迄打しなり杖も五のま把らくるべしといふ經文も五の巻なるハ不思議なる未來記の經文なるを末法の始め中恐怖惡世中の金言をあふ故に只日蓮一人是をよめり然れバ去の不輕品ハ今の勧持品ハまた未來の不輕品なりその時ハ日蓮ハ不輕菩薩なるべきの故に彼二十四字と此妙法蓮華經と云ハ異なれども其意全く同きゆへなり又涌出品にハ日蓮が

為には少しも異なる事あり。其故ハ釋尊本化菩薩を唱の導師と呼給ふゆへなり。かゝる不思議の日蓮を產出せる父母ハ一切衆生の中にハ大果報の人なり。其子と成も宿習なり。もし日蓮が法華經釋尊の御使ならバ。父母も何ぞ其故ならんや。例をば妙莊嚴王淨德夫人淨藏淨眼のごとし。釋迦多寶の二佛日蓮が父母と變じ給ふか。又ハ上行等の四菩薩の垂迹か。不思議に覺ゆ。一切の物に亘て名ハ大切のことなり。日蓮と名のるも自解佛乘といひつべし。かくいへば利口げに聞ぬれども。道理の指所左もやあらん。法華經神力品に。本化の菩薩の德を稱て日月の光明の能く諸の幽冥を除がごとく。斯人世間に行じて能く衆生の闇を滅すと宣給へり。此文の意をよくよく案させ給へ。斯人行世間の五字ハ上行菩薩末法の始め五百年に出現して南無妙法蓮華經の五字の光明をさしいだして無明煩惱の闇を照べしといふ事なり。日蓮ハ上行菩薩の御使にも似たり。日本國の一切衆生に南無妙法蓮華經を唱よと勸るが故なり

南無妙法蓮華經上已略書 條出篇入

閏三月五日

日蓮在御判

桑谷妙密上人許に

第十一　女人成佛

日眼女並に曰かく。抑女人ハ五障三從の罪ふかくして。一

代五千餘年の後に末法
義經と斗女人成佛ハ說
男子に記して女子ハ記
り此を台大師ハ他經ハ
滅後一千五百年の順漢土
返まく見ひらくひらけ
人成佛の說有と宣ふ
乳女初て女人成佛を
姨母摩訶波闍波提比丘尼
人の着ふともハ初めて
る一切の女人ハ法花經を

べき一代無量の經々に
ふぐに成佛をゆるせ
程打ち倉ちとに
らん何ろ嬉しく
ハ法義經を指
難日月四天等
中ハ女人のくるま
のくる鳥ゆく
弐十八人なり女の
其中ハ呂日蓮ゲ
をのがれる
高祖御書全記

於一切衆生中永為第一と定めおかるる事
南無妙法蓮華経と唱へ奉る事
二月日

四條金吾殿御返事

日蓮在御判

第十二内典孝経

開目書に曰く・そもそも一乗あぎく諸小衆生の成仏を妨するとや
此女の成仏は末代一切の女人の成仏を妨生とのごをふ
こと安きなるべし・衆生に限て
未来のくるしみ我扶るなるべし・仏法の中すも法花已
前の諸宗ハ自身の得ざる所ろ狂うをひぐく・まして父母
の沙ろをや・そ法華経ま来て此女成仏の時こそ衆生父母

成仏を云なま・ま多衆人成仏の時こそ衆生父の成仏
もあらはま・ま法華経ハ此経ハ内典の孝経なり・父母を
扶る孝養は法花経ほ過ぬ況や成仏をや・
此南閻浮提の内ハ二千五百の河あり・一こ小河曲れり・仏
ハ皆を一切女人のんのごとくへとくり・但一乗経
耶と申ひもの縄をひきはくくとるがごとく・直ま大海ま入
なり・法華経を信ずる女人まくくのごとし・直ま霊山
浄土へ至べし・皆此の一こまれ切流なり・もれバ此法華
花経と者ま字ハ五字七字にくいくども・三世の諸仏の
御師女人成仏の御父なる事・宝達ま至ハ燃火となる・死出の
山ま越るとくは云ぞとなま・天ま日月のごとく・地ま順

弥山のでく生死の大海をこえて成仏得道
等閑也
南無妙法蓮華経上暑甚
文永九年申二月日

第子檀那中ゑ

日蓮在御判

第十三身宝塔
阿仏房出ヲ曰く・仰ぜ文ヲ多宝塔ハ何
ゾを表ーぬふやとちの上生法門ハゆゝしき大事ゆてい
宝塔をさとるに天台大師ハ文句の八の巻ヲ御ぜ記
後二重の宝塔をヨ巻ごとられ・文殊師塔の法門ぢこれ

則境智二法の大事ちり不識三周の説法法華経ヲ本
りく・已ん宝塔を見るとそふるちり・乍日蓮ゞ第子檀
那ホもゝくのめし・未法ホかく法華経を持つ男女
の姿の外ヨ宝塔なきなり・若ちらば貴賤上下を捨バ
ぜ・南無妙法蓮華経と唱ものゝ我身宝塔ぢして我身ヒ
多宝ヨ宝塔ぢり・妙法蓮華経ホ宝塔ちきちり・法華
経の題目宝塔ちり・宝塔又南無妙法蓮華経ちる・今阿
仏房上人の身地水大風空の五大ちる・此五大題目の五字
ぢる・死ハ阿仏房さるぐら宝塔ちり・宝塔ハちぐら阿
仏房ちり・皇より外の才党ハ各宝ちり・凡信我宝塔
の七宝残ルくのぎまたる宝塔ちるまゝバ多宝宝塔ホ本

を供養しのふらとれも〈ぶはるまてふれまでゐ書を
供養しのふ也。ことの月則三月卯一のめ末ありとのく住
ド・て南無妙法蓮花経と唱かそで是は法ずら実塔の
住処ありり・経よ法を経を説ま小泉此実塔をまの如
現きんと説ふるを是ありり・あまりの経此へで実塔を
書顕し・逢ぜん・子よなうらずん譲ふとするまで信仏強盛の
をのふあうずを見まするまうまで出世の本懐とは是
なり
南無妙法蓮花経上巳畢

文永九年申三月十一日

日蓮在御判

阿佛房上人許ゐ

第十四佛性常顯

初心成佛出ふ曰ふく。抑妙法蓮花経と者我ず衆生の佛
性と・梵王帝釋の佛性と・舎利弗目連ずの佛性と・文殊
弥勒ずの佛性と・三世の諸佛の悟の妙法と・一躰不二ずる
理を妙法蓮花経とふ名るまりり・是故ふ一さび妙法蓮花
経と唱れバ・一切の佛・一切の法・一切の衆生・一切の
梵天帝釋・閻魔法王・日月衆星・天神地祇・乃至地獄・餓
鬼・畜生・修羅・人・天・一切衆生の佛性を唯一音に呼ぶバ一
まる功徳無量無辺まる事ま我已心の妙法蓮花経を本ず
とあぐ免まりふく。衆已心の佛性南無妙法蓮花経と呼

よばれて顕れ給ふ事也。譬へバ籠の内の鳥のなけバ。空とぶ鳥の呼れて集るが如し。そら飛鳥あつまれバ。籠の内の鳥も出んとするがごとし。口に妙法を呼奉れバ我身の仏性も呼れて必あらはれ給ふ。梵天帝釈の仏性ハ呼れて我等をまもり給ひ。仏菩薩の仏性ハ呼れてよろこびの給ふ。されバ若暫持者我即歓喜諸仏亦然と説給ふハ是なり。これらの趣をよく〳〵意得仏に成ためにハ我慢偏執の心なく。南無妙法蓮華経と唱へたてまつるべき事也

南無妙法蓮華経上已畢書

日蓮在御判

弟子檀那中江

第十五 霊山契約

波木井書に曰く。日蓮ハ日本第一の法華経の行者なり。日蓮が弟子檀那等の中に日蓮より後に来り給ひ候ハバ。梵天帝釈四大天王。閻魔法王の前にても日本第一の法華経の行者日蓮房が弟子檀那なりと名乗りて通り給ふべし。又法華経ハ三途の河にてハ船となり。死出の山にてハ大白牛車となり冥途にてハ燈火となり。霊山へ参る橋となり霊山に行着て。艮の廊にて尋させ給へ。必ずまちたてまつるべく候。但し各の信心よわく候ハバ峯の石乃谷へころび。空の雨の地に落と思めせ。大阿鼻獄疑ひある

べうずそのとき日蓮さま〳〵恨さをものふべうびんをもつ
信心よるべくの大聖通法强の名の〳〵地獄も落くさみ
塵點劫を經るまでも久遠下種の雫のぢごくも落て五百
尊點劫をうきさまたるまでも結縁知識も値ず法花經我ら
そらも信ぜ〳〵ゆくあるり。雖〳〵信んゆく霊山へまいる〳〵て
日蓮を尋させのく。その時こそ〳〵く申べき方も
甫無始生死華經起罪業
弘安五年壬午十月七日
波木井殿御判
日蓮在御判

高祖御書巻中終

妙なる
法華は
かよこ
松竹梅
曇なこそ

りなんとなり。余も忘却に及ぶべくそのまゝ徒ざ
しも侍ま」ばいとゞ疎遠ならんなどもゝ佛子のつとまな
くんるのさまもりありそ。
極りて終ふそのなくなりぬ。さそのふあまどそのこゝ同
行男女の耳を驚まそく。まこのこゝより生一期をとゝの
へよとの催しけまゞば。今年余未だ申さのそもなる禅
證悟のいと旬に出るひをれるひ出て宗祖のみ我ひ
らき。所〳〵肝要の旨残掘要略抄〳〵けまゞぞ十五箇とふ
なりぬ。こゝ〳〵肝要の旨残掘要略抄〳〵けまゞぞ十五箇とふ
のみ残和の傳通用心抄ふいそく。生身仏田向
へくるゝるなのまゝとそく。浦縫の鈔ふ再三よむべし。あ
禅門のん願も朽ぞ。自他倡同會霖光なるんもの旅。さの
りとゝくども録内録外の御文數百通ふ侍まゞば。生抄ふ大
山の一莖大海一滴のごそ〳〵。けまゞば社よこ覚て協法席
に詣で数〳〵聴罗あらゞば。法門の有趣よくんるなちて存
心日ごそすゝみるんまこのうゞ又読なりとて夫ふほまり
て年少の沙弥まゝふ初学より出家さちは数〳〵て慢の
わもひをるゝ。生抄の中社法門を決〳〵問答する
るなのまゞ狂みまいまのぐ侍ざるをゐこりとたもふも
のを。未得謂得の增上慢と記まこまゞば。生身悟ぐ用ん
あまよよう〳〵。催よくく読場こゝふ祖の御化導の本さを
まこまおば。ふ吉の悟ゐ妙法のあんどん日と深くなる

なんどの八萬の出家よりもまさる。仏のそもるふ處
ますぐなとくならんと。ねがひそうふまさきを取るのこ
○抑吾宗の妙法の安心宗旨の悟るといふは。別ふ口
他の才覚をもちゆるふあらば。人界五尺の肉体是法花経
の所詮すなわち我ら活物。妙法蓮花経を生死古仏の血
肉種智の宝だへなりと悟るを極るの外いさきなり。
是即宗祖大菩薩の観心本尊抄。趣勘文抄。十如是抄。
おの意ハ是なり。御化導におひく宗旨自行化他
の不同あり。その本よこれハ宗旨目りの一大事の法門
なるく信るなり。その主をいそぐ。法花経第一の方便品
に唯仏一大事因縁故出現於世。欲令衆生開仏知見使
清浄故出現於世と説のくりかへしのまろハ私ハ衆生のね
法ハ本来清浄の仏知見なりて生死の当体久遠古仏の
血肉なれども衆生ハしらず。諸仏ハこれを憐ろくめて
不清浄なる眼をひらきぬんが為ふ御出世あり。ねどとも
生るたやすらぎれば成仏の後四十余年ふ生
の権教ねんもうけて衆生の機様をとのへ後ハ七年ふ生
天下の国縁を説ふぞといふ経文なるは。法
きバ天台大師も。若衆生ハ仏のちをんなくんバ諸仏ね
んぞこれをひらくべしと釈をひらくと釈尊生ハ仏
仏の知見ハ衆生に禀在すと釈尊のくりかへしを禀在
とハこのくれあるとハふるふるのて雑多の知見ハ我ハぐん法

乃底ふかたがりてのまといへる文をもつて・み宝塔品に若
ま経持説持仏弟子とてもつぐ〳〵と説のひ同じく次の文
まは薬持法経是生経是仏子とて・法華経を読持もつ乃
ハ是真の仏のみありとあめのふも・ま〳〵て霊山八年の
御説法ハ生ずの大ま・にのまばまり・文をかく荊渓等
若ハ摩訶衍八年不生一二年とて・八ケ年の間二十八品の御説
法ハ皆生のの法の妙法まる旨戒のべのふのこと雖をら
まま・まく〳〵ふ祖大荊まは法華経八軸ハ赤牙の上の日記文書
とふ〳〵のま・されバ法華経ハ一切衆生久遠ご来・妙法
蓮花の血脈まる由来を説ぬきらまてこる我牙の系図の
ハ巻まり・波宝塔品をの多宝牙れ諸仏も唯一大事

の御ふよりなつまらせのふぞとん得べ〳〵・よつく多宝塔の
五百由旬まるも・一切衆生の牙体ハ本来このくのてきり乃
宝塔ぞとをつへん為ふ浦現一のふまり・文をかくのてき乃
そる宝塔の由来を宣ふとく多宝如来の五通書を行
げて曰ハく・釈迦度の協・我身を仏舎をんとれもつぐ・五
百由旬の宝塔を起くく仏舎すべ〳〵・若則一念牙を仏義
するにまぬと仏せ仏ま一ゆくよ・生宝塔ハ仏まりとも
雖ふ説せのくり・我ハ則寂牙塔の全体ハ多宝如来こ全牙ふ
して・まさ五百由旬まる八若の五陰五大種を表しのふなを・
さまバ我拘牙の大海ふ・五陰和合仮名衆生とて仏の御
牙も衆生牙体も・とも同くる事也り識の五陰地水

大乗の空の五大種を云ふあつめてる別体なりと雖も
ひて仏身も名生身も五百由旬の寿量ぞと
由遠をあり〳〵ハ生なりこゝをもつて諸仏の出生
尓時小塔の中より大音声を出して歎てらく善哉
〳〵釈迦牟尼世尊大恵普法仏所没念の如
法蓮華経を〳〵大衆の為め説のごとき皆是真実なりと宣へり注曰
尼世尊の所説のごとき皆是真実なりと宣へり注曰
義ふの中ハ如是ことと云て仏ある事ハ一念の大衆の別体
ハ全くこのごときの宝塔なりと比ふ事ハ
なり・されバ当ハ祖大菩薩も法花経の時ハ宝塔ハなり
〳〵ふ名生の別体生変塔のごと〳〵とをへん為り

こゝまゝ云ふ名されて出現〳〵ハすると云へり・我ハ
ハ活物・如法蓮華経五法を具の宝塔まして・釈迦多宝と
一体不二の血肉なり・諸仏出世の本意ハ衆生一大事
よありと深くおもひ
ハ一残ハてこゝまゝを法
一まつこれ〳〵らず・善ふ家の
一切を賢くぞと安心
ひするに・と口と善
行の言葉ふ照るふれ
念三ふの如ハとふ名付のふ事
○又称ると我ふと不二の仏体なりと歩て・経ふのご

とく上下の位ありて差別あるべし。理性も一体の仏なれども事相の迷悟の不同あるゆゑに。天台大師もまた即の位を分ちたまへり。いはく大略と即仏の位・二は名字即仏の位・三は観行即仏の位・四は相似即仏の位・五は分証即仏の位・六は究竟即仏の位なり。初の理即仏の位とはいふは理性の仏といふことをさとりて我が本来妙法の仏性なることをさとらざれば西方東方の衆生をねがひ、また邪神を信ずることをやめつつ一向に法花経を信ずべきの他宗を捨て法花経を信ずるの位をいふなり。名字即の位とはいふは文字を学して理即仏の位をさとりて後に善知識にあひ、自身と経巻とをひらきて、五尺の身五百由旬の宝塔、娑婆世界、虚空会の諸仏菩薩、皆法花経の妙果なりと知るを名字即の仏の位といふなり。観行即の位とはいふは文字の心を観じ理を観ずる位なり。けだし善人の理をさとり心を一境に住して一念二念ないし多念相続して増進して住功徳ふかくして、根の発得明了なること、なほ磨ける鏡の垢を払ひ、清水の底の石を見るがごとくなるを観行即の位と名づく。これ仏の位と名づくるなり。また読誦経巻題目を唱ふるを観行即の位と名づく。これ口と三業の発得顕現するなり。相似即の位とは五品弟子の次第ありて、しばらく略す。法花経第六の別功徳品にくはしく説のごとし。根性住功徳ふかくして、二毒五欲きそひおれども、さこらまでで、因に従ひ縁の起るを見ても心を澄ませ、名をおそれ、耳をもるくの悪言をきけども心を瞋

毒悪病をおこさゞれバ。眼耳鼻の六根平和清浄の境界にいてるを相似即佛の位と名づく。みだ六根清浄の行人とも名付るなり。眞実法花経中と宣ふ法師功徳ハ。ほぼ是なり。お似とはあひみたるやうなるとゝいふ事ます〳〵。此人のところゞて佛界の心よりあひみたるやうなるを。名生即佛とハ件の如く一段増進して化他の志をおこし。功徳圓満ならしめんがために他人を誘引する成分生即佛のり人と名付るなり。ちよろゞての深き所一分佛の益如是度大なる事同じ〳〵なり。味益如是化の度大益〔ママ〕なるを究竟即佛の位といふ名く。是則大聖勝号の位なり。生とみハ信毎の滅信毎の厚薄をこのり自我の位より。塵塵劫を経て十五日ハ滿月ほいてるおぼつかなし。見えぎれどもきよあらぐ。是ハ妙法をもちざる事ハ信位なり。名字即の人ハ三日月の僅ほ西の空に顕れたるごでゝ。観行即の人ハ四日より八日までの月の次第に増明ちるのごとし。お似とハ根浄の人ハ九日十日の月のますく〳〵きらのちるごとし。名生即の人ハ十四日ハ十五夜の月のひろり一点滿月ほひとしきごとし。究竟即の人ハ十五夜の月の光のざとし。滿月と三日月とその体二ッちら称ども光明ほ

は次乎乃至ぐどとし・法華ハ迷悟の厚薄信ん
より入生ハのふ同ほれば・我信心ハ今いそぢきの信なあ
ると自ことき」を分別ふく堪上慢をおこすべらばさ
く生死体蓮花佛の境界を今日始て堪ふりとおもふを
迹門妙覚の仏人と名付・又ふ」のむうしよりあくのご
ときハ乃境界すて・今ハ信解するを・本門本覚の仏智とハ名つくる事ハ
ハ本迹の不同ハ雖然も成ろのちらきをハとまきむう
しを面可ふ説ことけふく・ふまふのことふく悟りのふかきの妙
法ハ本迹二躰ハあらざるなり・爰をハく天台大師ハ
本迹難殊不思議一とて雖然も成ろの時代ハ今いとは昔の

不同なきども悟まふ所の妙体ハ一なりと雖一のふ
り・不思議とハ妙法の是名ふく妙体ハ不二とふ
とまり・み本迹妙躰無二と宣ら」まふるも生」
まり・されど則本迹の二ツハふるの双樹・東の面輪・我身れ
面手のでく・と心ハべし・左右そづれの手をうふくことよ
り前まや・中央の五尺の身体ハ入」まふ古佛の異面ふく・
元ふ妙法の引体まり・生体より生出生きく面のまハ所
本迹の二ツまで・妄一方城失ひまるば即不異ふの蓮花佛な
らんのごふ・ふ面の翅をハふくまるく飛車ハ面の輪をハて
とふくゆき我ハ面のまで城今て三変をハ住ふ恭敬ふ
まく生牙城霊山浄土へ送りとぐくるまで・さま」ハ吾

祖大井の玄ろく・抑大白牛車と申ハ我も人〻も法花経乃
功者の念ふるべき車にそくハ。本迹二門の輪を明法華の
牛ふのけ・三界の火宅をのがるゝ車なる也・但信心乃
欠ハ現在未来の両途俱ニ捨ハ往生も現
○法花経の行者のほ生ニハ現在未来の両途俱ニ捨ハ往生も現
ゐるべし・成仏すでふ現在未来の二経あるべき理あり・そのゆへハ
在・往生未来ハ生の中に若善男子若善女人ありて・映法
姿ふに曰く・未来世の中に若善男子若善女人ありて・映法
蓮華経の提婆達多ハ現世ニ悪道ニ堕ちて・映法
蓮華経の提婆達多ハ現世ニ悪道ニ堕ちて・
生ぜざらんものを・地獄餓鬼畜生ニおちざるべし・

の仏ふのふうまれ・所生の経をきゝて・ふ此経をきゝ
人〻をの中よりまれてハ諸仏の生の家ニうまれ・
らハ蓮花より化生すべきなんと説をのべり・ほ
鬼畜生にわちずして十方の仏ふにまいりあ
我とめぐりおもふへし・浄心信敬して十方の仏ふにまいる
そどのり人の地獄おちの業ハ勿論の
偏ふの罪・ふのまゝ生神通をまさに似たり・ふ立法花
経を翻読とて・ふ堅の玄ろを大唐の言葉ふ取をし
ひらく経什三花とひら〻ハ男をこの免るゝ事を百生をつゞめふとる
ふまの大智度論と・ふんまうまハ〻とひ梵本ふも生又ハりとも男一のふべき

ふ。左ばらぬ。本罰ろうずや物ゝ狂ふに是人命終ともも
枉生命終とも未来をさうしのふ事のうきハ。よろ
ず〳〵法華経の功徳の現生住生を説きのふ狂ふぞ
とんぢべきうき。抑人界より
も女も貪欲瞋恚疑の念重おさ〳〵〳〵。みるの夢
うの縁ひろれて。地獄の邪見。餓鬼の貪欲。畜生の愚
痴。修羅の瞋恚。交起りて。ひまどもなし。その〳〵
びくよ三悪道よハおりまぜ。仏祖ハこれを経知見し
今数〳〵他人の面を見るふ。或時ハ貪欲の相を現じ。或時ハ瞋恚の相を現じ。或
時ハ愚痴曲のお坊現ずるあり。愚痴ハ畜生貪欲ハ
餓鬼。諂曲修羅。平和るハ人界。ハ天有心ろ三子とハ誰人の心法すも地獄より
仏界までその十界ハそなく。まゝとも。人間平和の本なり。まて仏界の善心ハ強れ
安住するうまゝあり。やすきハ三悪四趣
こうぐ〳〵。強ふひろまて。ほかくち善根
の念慮の〳〵。善念のまゝあり。是旦その強にひろまて
までそまゝくの相貌見ゆるあり。是旦その強にひろまて
ゑんの地獄界。餓鬼界。我心の畜生界。ハそなく
堕落し。ばるまゝ。しられとも生捉婆ふを聴ふの男
女は苟体蓮花仏の境界を浄仏住敬して。ゑ事の起

里遠る時も同も心も見ば耳もきけどもも心
もきこゆべし口もとのまどもも心もいのらば唯南無妙法蓮
花経〳〵と打ちひけさば心は今に十界の仏
あつまりて妙法蓮花経をのを聴聞すとこそ経文
里法中の十方の仏あつまりといふことは
同く次下の編照指十方の経文を天台大師は遍照十
方界と釈せられたるを仏〳〵云〳〵の同じきをもて
べきなり・まことの人天の中よりは猶妙の字を尊
〳〵といふ経文なれば今に人も天も五仏も菩薩も
大虚を尽すとなり・若ばこの五字も是
くまれを説せるふぞと心得べし・浄土とは又
にきよきところとのきこえ三悪四趣の名をおこせば不
浄の心なり・此不浄なる
住ば娑の二字は住じ娑ば
外なり・ここの名は是活物妙法蓮花経
悪althoおとし〳〵へざるとの
〳〵り者の身体を説ひ故
をするふと心得べし・さて生現在は生を
を尋ぬれば八界の衆生なり・されば女成仏
性之間は変じて男子となり・するうちも方を垢世界
は性とく変蓮華蔵世界
生変蓮華成等正覚の八字は女人成仏の源なり

即往南方無垢世界の八字は龍女即身成佛の證文なり。忽然之間變成男子の八字は男女の佛性一躰の現證を示しゐふなり。上に舎利弗が龍女のうたがひに女身は垢穢にして法の器にあらずといふさまに五障をはなれぬといへども詮する所男女性躰各別にして女は男にならねばかなはずといふ意にて是則ち爾前權門の心なり。法華經の意はしからば男女の佛性只一種の妙法なり。現證をしめさんために忽に變じて男子となりぬと心得べし。さく即往南方無垢世界とは上に十方佛を説きたる現在往生の證人にてこゝろあるなり。此現在往生するはち即身往生の儀なり。さるに無垢世界とは煩悩の垢穢なき清浄の土なりといふことなく、すなはち上の淨心信敬の境界をあらはしたまふ言葉なり。彼蓮華王品・普賢品は法華經の結經未來往生を說せたまふゆへにまた是人命終すとは於此命終とあれども、今の提婆品は此一句のなきを以て未來往生の一邊にかぎらざることぞ殊なるべき也。此ゆへに開目抄に龍女成佛は一切の女人の成佛と往生との道をあらはしけるなりとありしかれども此理を能く心を用ひ悟りあるべきものなり。それらを用ゆるには摩訶止觀にも說すでに勤めぬれば三障四魔紛然としてきそひ起る恐るべからず隨ふべからず。これを怖れぬれぞ[illegible]

を妨げこれを退へ人を惑乱することなり。
はゞ妙法の行人に用ん悩乱を肝要なり。三障とは煩
悩障業障報障なり。四魔とは陰魔煩悩魔死魔天子魔
より起る来る魔障ぞと心得べし。財宝おゐき所より
盗賊の恐を懐るが如し。住ん強盛の所よりも必障礙きそ
ひ来く住りを妨るものありと知るべし。仏も天子魔
とハ第六の天の魔王のおこせたる人ハ必ず三界を出離しく二世安楽を得るゆへ
是成嫉ふくさやくぐるなりと。弥勒菩薩の瑜伽論
説き。り。此ともを悔まこれを退ふるものなり。

三障四魔きそひ来らバ仏神の垂住りをてろくやす
ふるらめと観念すべし。さまでバ吾祖も吐止観の第八日
蓮ゲ身よあくるのそれあらば。門家の亀鑑なり。智ひ修
へくまゝの資糧とすべし。さまざまくり。ちれず
魔障のきそふ時も。唯ちに妙法蓮華経ことゝ打ちひ
悟く解く用ふするこれ智ひ修へく資糧とするのところ
なり。しくりといへどもこ陣四魔きそふ時の答画ふ。
強敵の立のかるゞでとくく。浩如の指来るにひとしくむき
へこのくく思びゞくし。是をよくくへたものぶを守ふ吉貝ゟ
のふ惜ゐ命とハみ徐るや吾祖大并一切衆生のこゝめ
三類の強敵をゝのびかふハ宗化他の不自惜身命者

りさてれらく初心の行人我身にむくふこと陳四慶
の恩徳をよくたくよくたくよくたくよく思ふ所故自ら
但憍慢上慢ぞと要ん一時すべきなり我祖も人界
の勧位なれ九界の会衆
起里きこらば佛界の法をなく無明すべしと仰ありき
佛界の法とは已ん乃妙法蓮花経ぞと言ひく石迫
の信行肝要なり
○爰はいかく成佛とは生ところちいくぐ言ふべきや
さきバうのわろをいくぐ我身の当体妙法蓮花の姿
塔ぎれば此所即寂光浄土なりと信行ふく佛ぉとも
にこでの月の内にそなはりと悟る時我身即佛の

り者とふいふなり
生の行人さ名付べし
く生人さ佛も浄土
ころえ給へ

高祖上人御書畧記跋

位一萬物育まるゝ先つ第一の人を子と考へ
みまたの名を不思議耳目鼻口身體を兼具
りたる人是妙なる事を耳に聞くことを
目に見ることを鼻にかぎ口にのまはひそれ
にゆきてんにそなはるに義禮智乃故因
つまる所を所謂法なるらん之ならなるとゝ
天下國家を治むるもなくてかをゝぬ法律
改事是妙法の法ちらすやいかなる規則らとて
乃ふても甘きたるもの胸中に恩威并ひ
行はれ活動なきものまた到底法是妙法
乃妙ちらまでこゝ乃外ぬ事のわたまてそ
弘と辞に盡さまて抑日蓮大士人未世ない
で弘通せる甚ぶ功かうはすく蓮華と
やまに未なのくそらく甚そかをまてること
り名物う一祖師の血脈秘書おを普く
江湖の人ゝおちまてとひなすらに校

訂をほどこすのみ
感あるまでおうし
話を賛すとふ

讃嘆の声もいでて
一天四海皆帰妙法

栃と葦酔山識

2
74

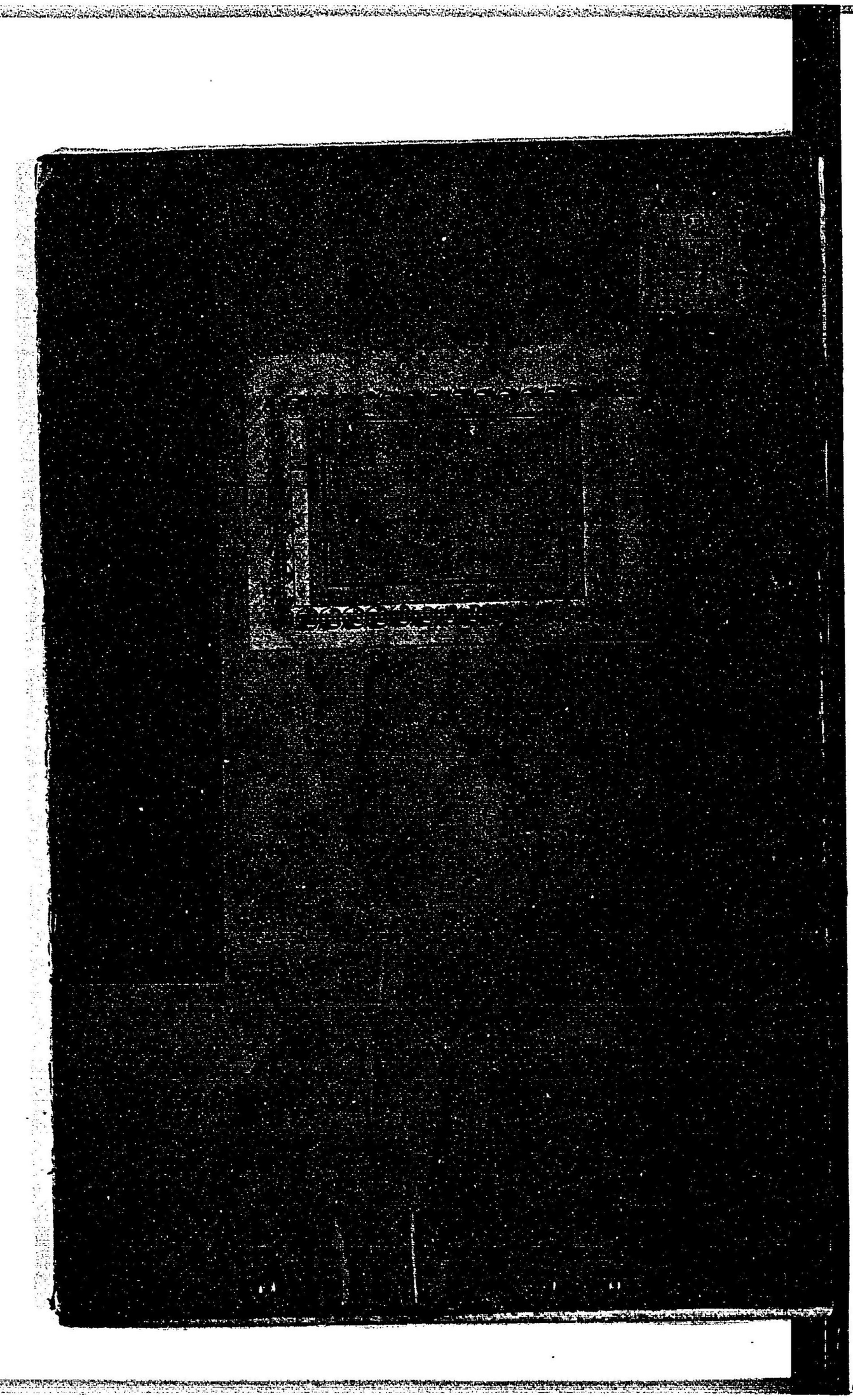
明治十七年八月廿四日御届
同年十月出版

定価二十銭

編輯兼出版人
石福已之助
日本橋區堀江町壹丁目二番地

日蓮宗書籍責捌所
須原屋
北畠茂兵衛
日本橋區通壹丁目

團扇問屋
伊場屋仙三郎
日本橋區堀江町壹丁目

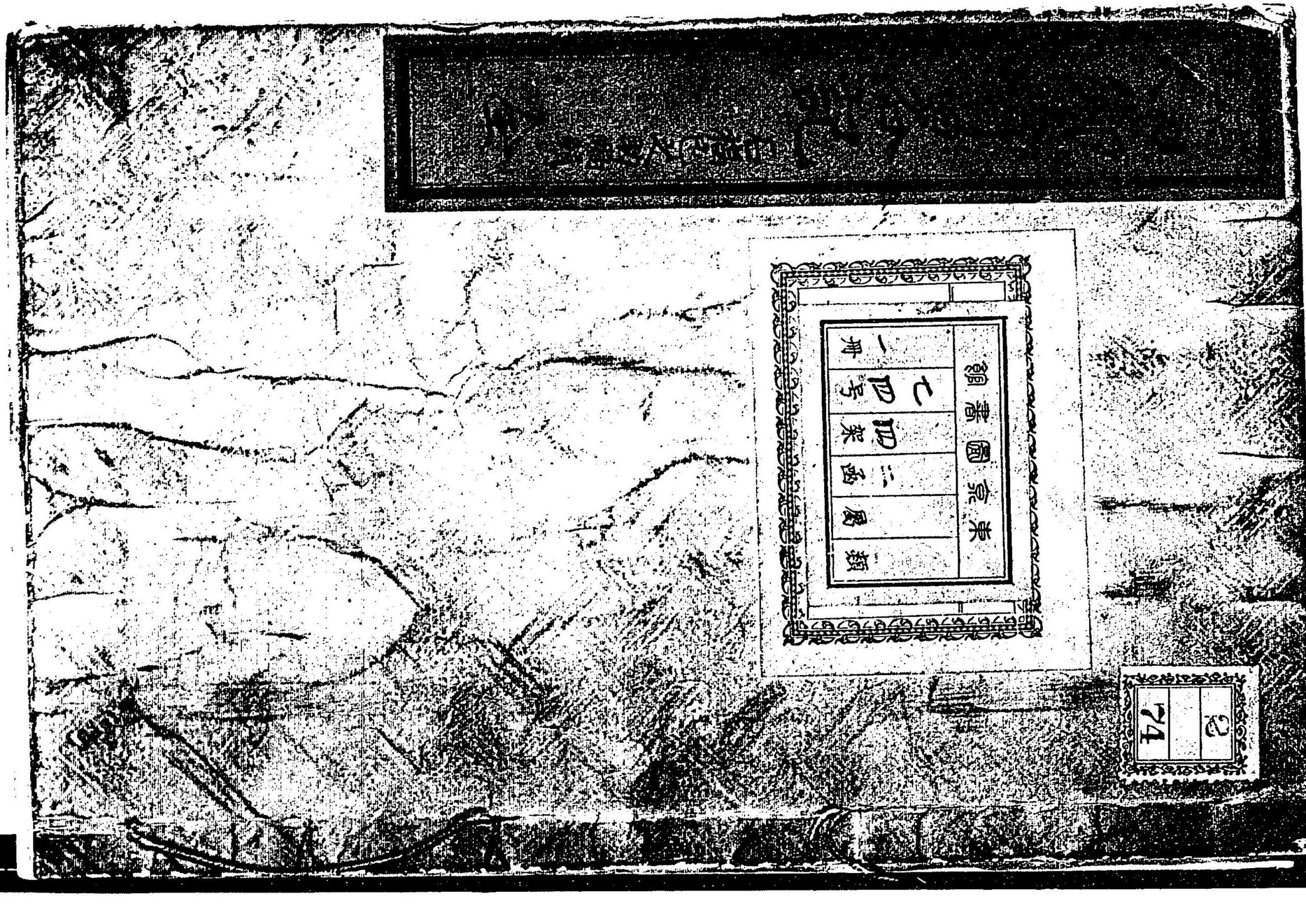


019928-000-9

2-74

高祖上人御書略記

石福　己之助／編

M17. 10

ABH-0067